慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	イェイツ『汽罐の上で』のパラドクシカルな構造
Sub Title	The paradoxical structure of Yeats's On the boiler
Author	萩原, 眞一(Hagiwara, Shinichi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2017
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション (Language, culture and communication). No.49 (2017.) ,p.69- 83
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20171231-0069

イェイツ『汽罐の上で』のパラドクシカルな構造

萩原　眞一

1

アイルランドの詩人イェイツ（William Butler Yeats, 1865–1939）は 1939 年 1 月 28 日，南フランスのモナコ近郊の保養地ロクブリュヌ・カップ・マルタン（Roquebrune-Cap-Martin）で客死する。同年 9 月，最後の著作『汽罐の上で *On the Boiler*』が，詩人の妹の経営するクアラ社（Cuala Press）から出版された。「序文（Preface）」を除くと 38 頁のこの小著は 7 つのパートから構成されている[1)]。すなわち，散文と 1 篇の詩から成る「名前（The Name）」（1 頁），4 章仕立ての散文「前置き（Preliminaries）」（5 頁），5 章仕立ての散文「明日の革命（To-morrow's Revolution）」（7 頁），5 章仕立ての散文「私見（Private Thoughts）」（6 頁），第 4 章を 1 篇の詩に充てる 5 章仕立ての散文「革命後のアイルランド（Ireland after the Revolution）」（4 頁），最終章の大部分を 1 篇の詩に充てる 8 章仕立ての散文「その他の問題（Other Matters）」（7 頁），そして詩劇「煉獄（Purgatory）」（8 頁）の都合 7 パートである。

『汽罐の上で』の成立過程を考察したブラッドフォードの『制作中のイェイツ』によると，本著作の構想は 1937 年秋頃に立てられたと推定される。同年 12 月から執筆が開始され，翌 38 年 3 月後半にほぼ現在の形に仕上がり，さらに加筆修正が施され，7 月頃に印刷に付された。校正刷りは出来上がったが，その後の印刷工程が思うように捗らず，「序文」の日付が 7 月から 10 月に修正されたものの，詩人の存命中は結局，出版には至らなかったということだ[2)]。

イェイツの生前，未刊行に終わった『汽罐の上で』は，その制作過程において手書き原

1）『汽罐の上で』は W. B. Yeats, *On the Boiler* (The Cuala Press, 1939) を使用。以下 *OB* と略記。

2）Curtis Bradford, *Yeats at Work* (Southern Illinois University Press, 1965), pp. 378–379.

稿，タイプ原稿，校正刷りなどの数多くの資料を残した。これらの資料をつぶさに比較検討したブラッドフォードの推定に従うと，『汽罐の上で』は，一朝一夕に出来上がったものではなく，推敲に推敲を重ね，悪戦苦闘の末に成立したということである。確かに一見したところ，各パートがなんの脈絡もなく雑然と寄せ集められているような印象を受けるが，実際は単なる走り書きではなく，内容と構成の両面にわたって緻密に練り上げられた作品であると言えるのだ[3)]。

『汽罐の上で』を巡っては，いくつかの優れた先行研究がある。その中で特に注目すべきなのは，本小著を「彼［イェイツ］の最もあからさまな優生学的著作（his most explicit eugenical work）[4)]」と評定したドナルド・チャイルズの『モダニズムと優生学』である。さらにチャイルズは同書においてイェイツと優生学の関係について考察を加えた末にこう結論付けている。

> In the history of twentieth-century literature, we must acknowledge that the poet［Yeats］who called himself one of the last romantics was also, like Woolf and Eliot, one of the first eugenists.[5)]

自称「最後のロマン派」イェイツは，英国モダニズム文学の 2 人の大立者，つまり小説家のウルフ（Virginia Woolf, 1882–1941）と詩人エリオット（Thomas Stearns Eliot, 1888–1965）と同様，「20 世紀文学の歴史において（略）最初の優生学推進論者」であったと断定されているのである。

確かに『汽罐の上で』を紐解くと，いわく「遅かれ早かれ，われわれは知性を欠く諸階級の家庭を制限しなければならない（sooner or later we must limit the families of the unintelligent classes）」（*OB,* 20），いわく「信念を変えるために，文明を再生させるために，戦争を愛せよ（Love war.....that belief may be changed, civilizations renewed）」（*OB*, 20）といった，いかにも優生学寄りの言説，あるいは優生学をも逸脱する過激な言辞を目の当

3）*Ibid*., p. 378.

4）Donald Childs, *Modernism and Eugenics: Woolf, Eliot, Yeats, and the Culture of Degeneration* (Cambridge University Press, 2001), p. 149. なお，Bernard McKenna, “Yeats, *On the Boiler*, the Aesthetics of Cultural Disintegration and the Program for Renewal ‘of our own rich experience’”, *Journal of Modern Literature*, 35–4 (summer 2012), pp. 73–90 も『汽罐の上で』を「優生学的著作」と捉えている。

5）Childs, p. 230.

たりにするし，それらを額面通り受けとめた場合，イェイツを筋金入りの「優生学推進論者」と位置付けてしまいたいという誘惑に駆られるのも無理はないかもしれない。もちろん，後述するように，彼が優生学的思考に傾斜していたことは事実であり，そのことを否定することはできないのだが，だからと言って，彼を「優生学推進論者」として簡単に片づけて能事足れりとする問題ではあるまい。

拙論では，『汽罐の上で』におけるイェイツは単純な「優生学推進論者」ではなく，優生学を信奉するように見せかけながら同時に優生学に対してアイロニカルな視線を向ける，一筋縄ではいかない，したたかな文学者であったことを明らかにすると共に，緻密に練り上げられた文学作品である『汽罐の上で』のパラドクシカルな構造を浮かび上がらせてみたい。

2

それにしても，優生学（eugenics）とはいったい何か[6)]。これはチャールズ・ダーウィン（Charles Darwin, 1809–1882）の従弟フランシス・ゴルトン（Francis Galton, 1822–1911）が 1883 年に提唱した疑似科学である。用語を分解すると，eu-（良）＋ génos（人種）＋ -ics，字義通り「人種改良」を目指すいわくつきの研究だ。「人種」を「改良」する上で重要となるのが結婚である。ゴルトンにとって結婚とは，とりもなおさず，すぐれた特質を組み合わせて，肉体的にも精神的にも好ましい「人種」を作る手段であった。「人種改良」するために「適者」の人為的な保存・増加を重視したゴルトンに対し，「不適者」の排除・抹殺を力説したのが，ゴルトンの後継者カール・ピアソン（Karl Pearson, 1857–1936）である。彼は，断種と人工妊娠中絶を武器としながら，アルコール中毒患者，狂人，精神薄弱者，犯罪者，病人，売春婦などの社会的「不適者」を標的として，排除・抹殺を図ろうとしたのである。このように，優生学と言っても決して一様ではなく，大きく分類すれば，ゴルトン流の積極的優生学（positive eugenics）とピアソン流の消極的優生学（negative eugenics）があるのだが，手段は異なるものの，目指す目的はただひとつ，「人種改良」であったのだ。

6）英国の優生学運動の歴史に関しては，主に富山太佳夫『ダーウィンの世紀末』（青土社，1995）198–277 頁，優生学全般については，Daniel Kevles, *In the Name of Eugenics: Genetics and the Uses of Human Heredity* (Harvard University Press, 1985)［ダニエル・ケヴルズ『優生学の名のもとに―「人種改良」の悪夢の百年』（西俣総平訳，朝日新聞社，1993）などを参照した。

なぜ「人種改良」が声高に叫ばれたのであろうか。それは当時，「人種」の「退化」意識が英国全体に蔓延していたからである。19 世紀のヴィクトリア朝時代（1837–1901），7 つの海を支配した大英帝国は一大繁栄を謳歌したのだが，後半に至ると，さしもの大国も衰退の兆しを見せ始め，英国人の多くは自国が徐々に腐敗しつつあるのではないかと感じるようになった。さらに，大都市のスラム街に住む下層階級の出生率が中流以上の階級の出生率を上回ったことが，「人種」の「退化」意識の猖獗にいっそうの拍車をかけていた。そこで叫ばれたのが「人種改良」であったのだ。

ゴルトンとピアソンによって開始された英国の優生学運動は，世紀を越えるや，隆盛に向かい，1920 年代・30 年代になると最高潮に達した。イェイツの『汽罐の上で』が刊行されたのは，まさに優生学が最盛期を迎えていた時期に相当するのである。

3

優生学に関わるイェイツの言説は『汽罐の上で』の中では，「明日の革命」と題される第 3 パートに集中している。5 つの章から成り立つ本パートの内容は多岐にわたっており，過不足なくまとめるのはいささか困難であるが，本論を展開する上で必要と思われる箇所を中心に，第 3 パートの骨子は次の 4 点に集約することができるだろう。

「明日の革命」の第 1 の骨子は，英国 17 世紀のパラドックス文学の金字塔『憂鬱の解剖 *The Anatomy of Melancholy*』（1621）の著者ロバート・バートン（Robert Burton, 1577–1640）を先駆的な優生学の信奉者として位置付けていることである[7)]。とは言っても，これはイェイツの独創ではない。ブラッドショーによると，優生学教育協会（Eugenics Education Society）の機関誌『優生学評論 *Eugenics Review*』の 21 号（1930 年 1 月刊）と 29 号（1938 年 1 月刊）にバートンの先駆性を称揚する論文がすでに掲載されており，イェイツは双方，あるいはどちらか一方を読んでいた可能性が高いからである[8)]。両論文に

7）Rosalie Littell Colie, *Paradoxia Epidemica: The Renaissance Tradition of Paradox* (Princeton University Press, 1966)［ロザリー・L・コーリー『パラドクシア・エピデミカ—ルネサンスにおけるパラドックスの伝統』（高山宏訳，白水社，2011）］の第 14 章「ロバート・バートン『憂鬱の解剖』とパラドックスの構造」467–495 頁は，『汽罐の上で』をパラドックス作品として考える上で興味深い。

8）David Bradshaw, “The Eugenics Movement in the 1930s and the Emergence of *On the Boiler*”, *Yeats Annual No. 9* (Macmillan, 1992), p. 206. イェイツと優生学との関係については，Elizabeth Cullingford, *Yeats, Ireland and Fascism* (Macmillan, 1981); Paul Scott Stanfield, *Yeats and Politics in*

は詩人が「明日の革命」の第Ⅱ章に長々と引用したのと同一の箇所が『憂鬱の解剖』から抜粋されている。

バートンは，イェイツが『憂鬱の解剖』から抄出した問題箇所において，子供を設けるにあたっては，慎重にも慎重を期すべきであることを力説している（*OB*, 15–16）。バートンに従うと，古代ギリシアの都市国家スパルタでは，肉体的な奇形や精神的な障害を持って生まれた子供は，即刻殺される運命にあり，また中世スコットランドでは，将来遺伝する蓋然性が濃厚な病気を抱えた子供が生まれた場合，男児は去勢され，女児は隔離されたという。遺伝性の疾患を背負った女性が子供を産んだことが判明すると，母子ともに生き埋めにされたこともあったということだ。都市国家スパルタと中世スコットランドの事例を肯定的に紹介するバートンは，国全体が堕落しないために，公益を最優先して適切な処置を施すことを是認し，イェイツが引用した問題箇所の最後でこう述べている――「われわれの世代は腐敗している，われわれは心身両面で虚弱な人間を抱えている，われわれはさらに悪化するだろうということだ（it comes to pass that our generation is corrupt, we have many weak persons, both in body and mind, ... and we are likely to be worse）」（*OB*, 16）。

こうしてイェイツが「明日の革命」の第Ⅱ章において『憂鬱の解剖』の一節を丸々抜き書きしたことは，詩人がバートンと同意見，あるいはバートンに近い意見を抱懐していると見なすことができるのではなかろうか。

第 2 の骨子は「生得の知性（mother-wit）」を巡る考察に関わる（*OB*, 17–18）。イェイツは，この「生得の知性」がほとんど環境の影響を受けずに子々孫々に遺伝すること，また子供の場合，それをかなり正確に測定可能であることを強調する。さらに「生得の知性」は，体力や財力と同様，階級の階段を昇るにつれて増大するのに対し，「生得の知性」を保持する家族の構成人数は逆に減少していくと彼は指摘するのである。これは何を意味するのかと言うと，イェイツによれば，ほぼ 1900 年以降，中産階級の出生率がしだいに減少し，その代わり労働者階級の出生率が増大してきた結果，「生得の知性」の保有者が下落し，今やすべての階層において急速な「退化」が進行しているということになるのだ。

では，この「退化」に対してヨーロッパの主要国はどのように取り組んだのであろうか。第 3 の骨子はこの問いに関わる。

---

the 1930s (Macmillan, 1988)；鈴木聡『終末のヴィジョン―W. B. イェイツとヨーロッパ近代』（柏書房，1996）参照。

The Fascist countries know that civilisation has reached a crisis, and found their eloquence upon that knowledge, but from dread of attack or because they must feed their uneducatable masses, put quantity before quality.....They offer bounties for the seventh, eighth or ninth baby, and accelerate degeneration. In Russia, where the most intelligent families restrict their numbers as elsewhere, the stupidest man can earn a bounty by going to bed. Government there has the necessary authority, but as it thinks the social problem economic and not eugenic and ethic.....One nation solved the problem in its chief city; in Stockholm all families are small; but the greater the intelligence the larger the family.....like the other Scandinavian countries Sweden has spent on education far more than the great nations can afford with their imperial responsibilities and ambitions, their always increasing social services and public works (my emphases). (*OB*, 19)

イタリアとドイツのファシスト国家は，時代の「危機」を認識しながらも，いわゆる「産めよ増やせよ」政策を実施し，「質」より「量」を優先した結果，「退化」を助長させているとして非難される。旧ソ連も同じ理由で手厳しい判定を受けている。独伊露の全体主義国家の政策が激しく糾弾されたのに対し，北欧の民主主義国家スウェーデンの政策は高く評価される。スウェーデンは，帝国主義的な野心に燃える大国に比べてはるかに多くの予算を教育に費やし，知能指数の高い家族の数を増やすことによって，「退化」の克服に成功したからである。

そして最後，第 4 の骨子は，よく引用されて何かと物議を醸すものだ。つまり，少数の有能なエリート階級と大多数の無能な「大衆」との間に「内乱」が勃発し，前者が勝利する未来を希求したからである。

The drilled and docile masses may submit, but a prolonged civil war seems more likely, with the victory of the skilful, riding their machines as did the feudal knights their armoured horses.....The danger is that there will be no war, that the skilled will attempt nothing, that the European civilisation, like those older civilisations that saw the triumph of their gangrel stocks, will accept decay.....Love war because of its horror, that belief may be changed, civilisation renewed (my emphases). (*OB*, 19–20)

「腐敗」に打ち勝つためには血で血を洗う「戦争」をも辞さないというのは，額面通りに受け取れば，いささか物騒な感は否めない。

4

さて次に『汽罐の上で』の第3パート「明日の革命」を1930年代英国の優生学の動向というコンテクストの中に置いて俯瞰的に眺めてみよう。とは言っても，話が拡散するのを避けるために，ここでは2点に絞り考察を加えたい。

第1点は当時の英国の優生学教育協会の内情である。同協会は1907年の発足当初から，前述したように，「適者」の人為的な保存・増加を重視する流れと，「不適者」の排除・抹殺を重視する流れを併存させているが，1930年代時点では，前者を支持するいわゆる穏健派が協会幹部――副会長は生物学者ジュリアン・ハクスリー（Julian Huxley, 1887–1975）――を主に構成し，1933年1月に成立したナチス・ドイツの強制断種法に対し強い反感を示していた。また英国政府内には，医師が無断で断種手術を行った場合，その医師を身体損壊の廉で訴追できる法律を制定しようとする動きも出ていた[9]。そうした状況を知ってか知らずか，イェイツは1936年11月に同協会に入会したのだが，彼の最初の伝記作者ジョセフ・ホーンによると，ナチス・ドイツにおける強制断種法制定の報に接して「大満足」[10]を示した詩人は，入会早々，さぞや場違いな思いを味わったに違いないと推察される。

それにしても，よりによってなぜイェイツは最晩年になってから優生学教育協会に入会したのであろうか。1つ考えられる理由として，『汽罐の上で』の執筆に当たり，同協会会員の特権を活かして協会から知能テストに関する資料を入手したかったからということが挙げられる。優生学教育協会事務局長カーロス・ブラッカー（Carlos Blacker, 1895–1975）宛のイェイツ書簡が5通現存しており，その内の最後，1938年2月20日付の手紙には次のような一節があるからだ。

> I am revising the typed script of a long essay on eugenics and various connected topics. I find one gap. Is there any authoritative definition of or description of constitutive "intelligence"? The men who made the tests must have had some clear idea of what

9）Childs, pp. 4, 6, 7, 11 参照。

10）Joseph Hone, *W. B. Yeats: 1865–1939* (Macmillan, 1942), p.467.

> they were testing. Is it power of attention and co-ordination? Or is it a sense of the significance and affinities of objects? (my emphases)[11)]

「優生学に関する長いエッセイ」とは『汽罐の上で』であると推定されるが，「権威ある知性の定義」が存在するかどうか尋ねられたブラッカーは，返答に窮し友人に相談した末，かろうじて2種類の資料をイェイツに送っている。この労に対し詩人は『汽罐の上で』の自注で謝辞を述べている。

第2点は心理学者レイモンド・キャッテル（Raymond Cattell, 1905–1998）という人物の存在である。彼は優生学教育協会から資金援助を受けて，イングランド中部の都市レスターおよびデヴォン州の農村部で10歳の児童を対象に知能テストを実施し，それに考察を加え，『我が国民的知性のための闘い *The Fight for Our National Intelligence*』（1937）と題する大著を刊行した。彼はその中で，知性の衰退がイングランドにおいて進行中であり，それが遺伝的な要因に根差していると結論付けた上で，この知性の衰退を根本的に阻止するためには，断種を行うべきだと強く主張したのである[12)]。この意味でキャッテルは当時の優生学協会主流派とは相容れなかったと言えるだろう。イェイツは長年，人種の「退化」を嗅ぎ取ってきたが，過激な遺伝決定論者キャッテルの著作の中に，「退化」を具体的に示す統計学的な「事実」を見出すことができたのである。詩人は『汽罐の上で』の自注においてこう記している。

> I recommend to my readers Cattell's "Fight for the National Intelligence," ..... I have taken most of <u>the facts</u> in this section, and some of the arguments and metaphors that follow, from this book (my emphasis). (*OB*, 18 n)

以上の2点から，『汽罐の上で』，とりわけ第3パート「明日の革命」が1930年代英国における優生学を巡る言説において占めていた位置が浮き彫りになってくるだろう。すなわち，同書は，①遺伝決定論に与している，②断種を主な手段とする消極的優生学を支持している，③「退化」を克服するためには「内乱」も辞さない，という点で，比較的穏健路線を歩んでいた1930年代英国の優生学教育協会，それのみならず断種を批判するムードが支配的であった英国全体から見れば，一種異様な言説と受け止められたとしても，そ

11）Quoted from Bradshaw, p. 210.

12）*OB*, p. 17 n.

れは致し方ない側面を持っていたと言えるだろう。

こうして『汽罐の上で』の第3パート「明日の革命」におけるイェイツの優生学的な言説の骨子を把握してみると，冒頭で紹介したチャイルズの評価を筆頭にして，彼を筋金入りの「優生学推進論者」として一面的に位置付けることは可能かもしれない。だが，事はそう単純には運ばないのである。というのも，イェイツは過激な優生学的言辞を弄する一方，優生学に対してアイロニカルな視線を向けてもいたのではないかと思われる節があるからだ。この優生学に対するイェイツのアンビヴァレント（ambivalent）な態度は，『汽罐の上で』の掉尾を飾る詩劇「煉獄」に如実に現れているように思われる。

5

詩劇「煉獄」については，優れた先行研究が汗牛充棟であり，筆者の出る幕はほとんどないと言ってもよいが，それを承知の上でこの詩劇の対話的構造に着目しながら，目下の検討課題である優生学に対するイェイツのアンビヴァレントな態度を探ってみよう。

詩劇「煉獄」は「老人」とその息子たる「少年」の2人の登場人物の対話から成り立っている。「少年」は16歳，「老人」は「50年前」に「16歳」で父親を殺害したとすると，66歳ぐらいと推定される。彼らの短い対話の中に「大きな古い家（the big old house）」（*OB*, 40）にまつわる親子3代の過去・現在・未来の物語が凝縮されている。「老人」の母親と父親が亡霊の姿で出現するが，それはあくまでも「老人」の幻視や幻聴として登場することを看過してはならないだろう。

「老人」と「少年」が交わす対話は，分量からすると圧倒的に「老人」の独白的な科白で占められている。そのためか，「老人」が開陳する詩劇「煉獄」の主要テーマ――すなわち木の象徴性，「煉獄の魂（The souls in Purgatory）」（*OB*, 40），夢見による回想（Dreaming Back），不釣り合いな結婚（misalliance）――にどうしても関心を奪われてしまい，それら4点に対する「少年」の反応や言動を軽視ないし無視して「煉獄」を論じる場合が多いように見受けられる。

しかし，詩劇「煉獄」は明らかに独白劇ではなく対話劇である。作者イェイツは意図を持って「老人」と「少年」を対置させているはずである。そのように意識しながら「煉獄」の主要な4つのテーマが矢継ぎ早に現れる最初の3分の1あたりを読み直してみると，それらを巡る「老人」の格調高い物言いが「少年」の冷たい反応ないし応答によってことごとく相対化されたり，茶化されたりしているのに気づかざるを得ない。2人の問答は意

思の疎通を欠き，噛み合わず，ぎくしゃくしている。2 人の対話，もっと正確に言えば，対話のズレは，何ともいえない滑稽さを醸し出している。もう少し踏み込んで述べると，「老人」と「少年」は，作者イェイツ自身の内なる矛盾，内なる分裂の肉化された分身たちではなかろうか。イェイツは，二重化された自己を「老人」と「少年」という対立する 2 人の作中人物に仮託し，両者に対話を行わせることによって，自己の分裂を相対化し，自己の戯画化を図っているのではないかと考えられるのである。

この自己相対化の方法は，すでに中期以降のいくつかの対話詩でも巧妙に駆使されている[13)]。例えば，ロマン主義者〈これ *Hic*〉と反ロマン主義者〈あれ *Ille*〉が議論を戦わせる「我ハ汝ヲ支配する（Ego Dominus Tuus）」（初出 1917）が思い浮かぶ。あるいはアハーン（Aherne）とロバーツ（Robartes）という登場人物の対話の中に，20 世紀の奇書のひとつ『幻想録 *A Vision*』（初版 1925）を執筆している最中の作者イェイツ自らが三人称の「彼」の形で登場する，非常にセルフ・コンシャス（self-conscious）な詩「月の諸相（The Phases of the Moon）」（初出 1918）などがすぐに想起される。

それはともかく，詩劇「煉獄」をイェイツが自己の分裂を相対化した劇であるという観点から，「老人」と「少年」の珍妙至極な問答の一端を具体的に垣間見てみることにしよう。

最初は「裸の（stripped bare）」（*OB*, 39）木を巡る問答である。木はイェイツの長い詩的生涯において最も重要な象徴性を込められてきたイメージのひとつだ。「煉獄」の「老人」は「月の光（the moonlight）」（*OB*, 39）や「雲の影（The shadow of a cloud）」（*OB*, 39）に何か思い入れをたっぷり込めて言及した後，「少年」に問いかける――「あの木をよく見ろ。／何に見える？（study that tree, / What is it like?）」（*OB*, 39）。それに対して「少年」は一言，すげない返事を返す――「馬鹿な老人にさ（A silly old man）」（*OB*, 39）。まじめに「裸の」木の象徴的な意味合いを探ろうとする「老人」に向かって，当人をからかい半分に揶揄する表現でやり返すとは，かなり嫌味な「少年」だ。「少年」のつれない反応に少し気落ちしたのか，「老人」は「何に似ていようと，どうだっていいや（no matter what it's like）」（*OB*, 39）とこの場はひとまず引き取る。

次は「煉獄の魂」を巡るやりとりだ。こんな具合に展開される。「老人」は「あの家に誰かいるから，あそこに立って，見ろ（Stand there and look, / Because there is somebody in that house）」（*OB*, 39）と命じる。「少年」は荷物を降ろして「家」の戸口に立って，答

13） 萩原眞一「イェイツの自己パロディ」（慶應義塾大学日吉紀要『英語英米文学』17 号，1991），pp. 25–43 参照。

える――「誰もいないよ（There's nobody here）」（*OB*, 39）。それに対し「老人」はもう一度「そこには誰かがいるとも（There's somebody there）」（*OB*, 39）と応じる。「少年」はと言うと，目に見えるまま即物的に廃屋の様子を描出する。実に冷静沈着で現実的な応対だ。

それでもめげずに老人は言い張る――「しかし，いるんだよ。（略）煉獄の魂が（But there are some /..... / The souls in Purgatory）」（*OB*, 40）。「煉獄」とは，周知のように，キリスト者として救済を約束されているのに，まだ罪の償いが済んでいない者が，最終的な魂の浄化を行うために設けられたカトリック教会の概念であるが，イェイツの煉獄観には，アイルランドの民間信仰からの影響が色濃く反映されている。それはともかく，「老人」が廃屋にいると強弁する「誰か」が「煉獄の魂」だと述べ立てると，そんな超自然的な存在など信じられないらしい「少年」は，「あんたは気が狂ってるね（Your wits are out）」（*OB*, 40）と言い放つ。

しかし，そんな強烈なジャブにも「老人」は少しもひるまない。いきなり「夢見による回想」の話題に転じるからである。「老人」によると，「煉獄の魂」は現世で犯した「罪（transgressions）」（*OB*, 40）を一度と言わず何度も「生き直す（Re-live）」（*OB*, 40）。そうした挙句，他人や自分に及ぼす「結果／因果の縺れ（"consequence"）」（*OB*, 40）を思い知る。「因果の縺れ」が他人に及ぶ場合，特に問題はないが，自分に降りかかる場合，おいそれと夢は終わらず，救い難い絶望的状況に陥る。この「夢見による回想」理論が滔々と開陳されても，そんな高尚なご託宣など馬耳東風，「少年」はついに堪忍袋の緒が切れたのか，「もうたくさんだ！／小鴉にでも話しな。どうしても話さなきゃならないなら（I have had enough! / Talk to the jackdaws, if talk you must）」（*OB*, 40）と突き放す。

さすがに頭にきたのか，「老人」は「黙れ（Stop!）」（*OB*, 40）と一喝し，さらに話題を自分の両親の不釣り合いな結婚に移す。「老人」の母は，本来ならば地主にふさわしい家柄の男性と結婚すべきだったが，事もあろうに，身分違いの「馬丁」と結婚してしまった。「老人」は不釣り合いな結婚が一族にもたらした「堕落」を非難するが，非難する当の人間が「わしは親父の息子だ（I am my father's son）」（*OB*, 42）と豪語するように，「堕落」の徴候でもある。それはともかく，「少年」は「老人」の父，つまり自分から見て「馬丁」の祖父を擁護する――「俺のじいさんは娘と金を手に入れたんだ（"My grand-dad got the girl and the money）」（*OB*, 40）。「ろくでなし（bastard）」（*OB*, 41）の「少年」から見ると，逆玉の輿に乗った祖父は快挙を成し遂げたのであり，褒められこそすれ，何ら咎めだてを受ける筋合いなどないのだ。

こうして詩劇の3分の1に限り，急ぎ足で2人のちぐはぐなやりとりに焦点を当ててみたが，この対話のズレは，演出の方法によっては，ドタバタ喜劇風に仕立て上げることも十分可能であろう。

さて，残りの部分でも2人の対話のぎくしゃくぶりは随所に見られるが，その確認は省略し，一番最後の「老人」の科白の検討に入りたい。「老人」は16歳の時，由緒ある「家」を泥酔の末に焼くという「大罪（a capital offence）」（*OB*, 41）を犯した父を，ナイフで刺殺した。そして今，父を刺したのと同じナイフで16歳の息子を殺害する。社会的「不適者」の排除と抹殺を目指して消極的優生学が強行する断種と人工妊娠中絶を遙かに凌駕する，究極の一撃だ。それは「血の汚れ（pollution）」（*OB*, 45）――いかにも優生学関連の著作に溢れている用語だ――に満ちた罪深い家系を断絶し，母親の魂を「煉獄」の苦しみから解放するためであった。

ここで「少年」の殺害後，「老人」が試みようとした2つの行為がいずれも失敗する点に注目したい。まず，子守唄と歌おうとしてすぐに放棄する。子守唄の一節は「おやすみ，坊や，父さんは騎士，母さんは美しく光輝く貴婦人（Hush-a-bye baby, thy father's a knight, ／ Thy mother a lady, lovely and bright）」（*OB*, 45）というものである。この子守唄の歌詞には，「少年」を「行商人（a pedlar）」（*OB*, 41）と「鋳掛屋の娘（a tinker's daughter）」（*OB*, 41）の子供ではなく，「騎士」と「貴婦人」の子供として誕生させたかったという「老人」の願望が仮託されている。しかし，歌う行為は挫折する――「わしは歌を忘れている（I lack rhyme）」（*OB*, 45）。次に「裸の」木に母親の「浄化された魂（a purified soul）」（*OB*, 45）の象徴を看て取ろうとするが，これは成功したのも束の間，すぐに徒労に終わってしまう。なぜなら，「老人」の耳に「蹄の音（Hoof-beats）」（*OB*, 45）が幻聴のように聞こえてきて，母の魂がいまだに煉獄の苦しみに囚われていることを悟るからである。「二度の人殺しは何の役にも立たなかった（Twice a murderer and all for nothing）」（*OB*, 46）わけだ。取り様によっては，何とも皮肉な場面ではなかろうか。

詩劇「煉獄」の性格を考える上で示唆的なのは，『汽罐の上で』において「煉獄」の直前に置かれた第6パート「その他の問題」の次の一節である――「いかなる悲劇も，さる重要な登場人物を最終的な悦びに至らしめなければ，正当な悲劇ではない（No tragedy is legitimate unless it leads some great character to his final joy）」（*OB*, 35）。「煉獄」の終結部は，

Release my mother's soul from its dream!

Mankind can do no more.　Appease
The misery of the living and the remorse of the dead. (*OB*, 46)

といった具合に，自分の「惨めさ」と母親の「悔恨」を鎮めてくれという神への「老人」の嘆願で終わるが，この空しく虚空に消えてしまう嘆願から，イェイツが悲劇の条件とする「最終的な悦び」を「老人」が獲得しているとは到底思えない。この意味で「煉獄」が果して悲劇であるかどうかとなると疑わしいと言わざるを得ないであろう。

それでは，『汽罐の上で』における第１パートから第６パートまでの部分と掉尾を飾る第７パートの詩劇「煉獄」との関係をどのように捉えたらよいのであろうか。拙論の冒頭で述べたように，『汽罐の上で』は生前のイェイツによって内容と構成の両面にわたって綿密に練り上げられた作品であり，「煉獄」が『汽罐の上で』を構成する重要なパートの役割を担っていること，また「序文」で「私の主要テーマに何らかの関連がある詩や劇（poem or play that has something to do with my main theme）」（*OB*, 7）しか含んでいないと言明していることを鑑みると，両者，すなわち第１パートから第６パートまでの部分と第７パートの「詩劇」との間には密接な相互関係があると見なすのが妥当だと考えられる。

とすると，どんな相互関係があるのであろうか。この点，評家は意見を大きく異にする。例えば，ブルームは，悪しき家系を断絶するために「父親」が「息子」を殺害する場面を強調し，詩劇を「実用的な優生学を実行する行為（exercise in practical eugenics）」[14] を描いた作品であると考えるのに対し，シーゲルは詩劇を第１パートから第６パートの散文で表明される見解を「劇仕立ての動画（dramatic animation）」[15] にした作品ではないと述べているのである。

以上，詩劇「煉獄」を対話的構造として捉え，優生学的な言辞を弄する「老人」とその「老人」を終始一貫して茶化す「少年」という２人の対立的な登場人物に，イェイツはぎくしゃくとして噛み合わない対話を行わせることによって，二重化された自己の分裂の相対化・戯画化を図っているのではないかという点と，もうひとつ，「煉獄」が「老人」の空しい嘆願で終わる非・悲劇的な劇作であるという点を明らかにしてみた。これら２点を踏まえると，筆者はブルーム説に与することはないし，シーゲル説についても，第１パートから第６パートまでの部分と第７パートの「詩劇」との連関性を認めていないと思われ

14）Harold Bloom, *Yeats* (Oxford University Press, 1970), p. 426.

15）Sandra F. Siegel ed., *Purgatory: Manuscript Materials, Including the Author's Final Text* (Cornell University Press, 1986), p. 25.

る以上，同意することはできない。

6

優生学に対するイェイツのアンビヴァレントな姿勢は，詩劇「煉獄」を除く『汽罐の上で』全体の構造からも窺われる。すなわち，第1パート「名前」で言及される「気違い船大工（a mad ship's carpenter）」（*OB*, 9）マッコイ（McCoy）と，第6パート「その他の問題」の最終章を占める詩「政治家の休日（The Statesman's Holiday）」の道化じみた「政治家」という2人の特異な人物が，『汽罐の上で』の冒頭と末尾に登場し，いわばサンドイッチ状に諸パートを挟み込んでいる『汽罐の上で』の構造それ自体に，イェイツのしたたかな戦略が秘められているのである。

まず『汽罐の上で』の冒頭で遭遇する「気違い船大工」マッコイの挿話を見てみよう。マッコイは，挿話によると，イェイツの母方の故郷であるアイルランド西北部の町スライゴー（Sligo）の港で行われたレガッタ競技の最中，ボートを漕ぎ入れて邪魔をしたため，群衆から小石のシャワーを浴びせかけられる。よりによってなぜイェイツは小著の冒頭にこの挿話を配置したのであろうか。当然，明確な意図があったからである。それは詩人が「気違い大工」マッコイに自らをなぞらえたかったからにほかなるまい。『汽罐の上で』において，とりわけ第3パート「明日の革命」において，政治と文学に関する自己の基本原理を包み隠さず開陳するならば，喧々囂々たる非難が巻き起こり，社会からは「狂信者（fanatic）」扱いされ，袋叩きに遭うことは必定。そのことを重々察知していたからこそ，『汽罐の上で』を読み進める読者の反応を見越し，機先を制するために，開巻劈頭，イェイツは自らを重ね合わせる「気違い船大工」マッコイの挿話を据えたのではなかろうか。とするならば，詩劇「煉獄」の対話的構造からと同じように，『汽罐の上で』の冒頭からも，声高に優生学を標榜する自己が他者からどのように見えるのか，自己を冷静に客観視する視線を看て取ることができるはずだ。

次に『汽罐の上で』の第6パートの最終章を占める詩「政治家の休日」に目を転じよう。

イェイツは南フランスのモナコ（Monaco）の中心街モンテカルロ（Monte Carlo）で執筆中，猿を連れて弦楽器をつま弾く「男」の噂を耳にするや，興味を掻き立てられ，「男」が以前，「偉大な政治家（a great politician）」（*OB*, 38）であったのではないかと想像する。そこでイェイツは「男」にあるメロディーに合わせてこう歌わせる。

I lived among great houses,
Riches drove out rank,
Base drove out the better blood,
And mind and body shrank (My emphases). (OB, 38)

語り手「私」は，かつては「大きな家」に住み，「偉大な政治家」であったものの，「卑賤が良き血統を駆逐し」，「心身共に委縮してしまう」。そして今では「流行遅れの帽子をかぶり／継ぎはぎだらけの古靴つっかけ／ぼろの山賊マントに身を包み（With a hat out of fashion, / With old patched shoes, / With a ragged bandit cloak）」，「鎖につないだ猿をお供に／雄鶏の大きな羽根をかざし／昔の卑猥な調べを流す（With a monkey on a chain, / With a great cock's feather, / With an old foul tune）」（*OB*, 38），いわば道化じみた格好をしながら，日夜詩作にいそしむ詩人稼業に就いている。

三文詩人たる「私」＝「偉大な政治家」は，詩劇「煉獄」の「老人」と同様，「退化」「堕落」の批判者であると同時に，その典型的な徴候でもある。1922 年 1 月に成立したアイルランド自由国（Irish Free State）の上院議員を務めたことのあるイェイツは，『汽罐の上で』の終結部においても，道化じみた三文詩人＝「政治家」に身をやつすことによって，片や優生学を唱導し，片や優生学を茶化しているのである。

こうして散文と詩と詩劇という様々なジャンルの混淆体である『汽罐の上で』は，過激な優生学的言説に満ちた主パートを，「気違い船大工」マッコイと道化じみた三文文士＝「政治家」というイェイツの「仮面」的人物で前後から挟み込み，さらには小著の掉尾を飾る「煉獄」では対話的構造を採用することにより，表面上は優生学を称揚するように見せかけながら，同時に優生学に冷ややかでアイロニカルな視線を向けている，実にパラドクシカルな構造を秘めた作品であることが分明になったはずである。

付記：本稿は日本イェイツ協会第 46 回大会（2010 年 9 月 25 日開催）におけるシンポジウム「1930 年代のイェイツ—*On the Boiler* における危機意識を中心に」に際して用意した「イェイツと優生学」と題する口頭発表用原稿に大幅な加筆修正を施して完成したものである。